九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

ドイツ民主共和国における「開かれた活動」の史的研究

村上，悠

https://hdl.handle.net/2324/2236011

出版情報：Kyushu University, 2018, 博士（法学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)

（様式３）

氏　　名　：　村上　悠

論 文 名　：　ドイツ民主共和国における「開かれた活動」の史的研究

区　　分　：　甲

論　文　内　容　の　要　旨

1989 年 11 月 9 日、東西冷戦の象徴とされたベルリンの壁が開放された。このベルリンの壁開放を実現させたのは、ドイツ民主共和国（以下東ドイツ）からの大量の出国者と東ドイツ国内の運動であった。この国内の運動は、89 年秋に登場したベルリンの市民運動グループとライプツィヒの「月曜デモ」と呼ばれる大規模なデモに代表される。「開かれた活動」と呼ばれる東ドイツ各地の教会で展開された青年の保護活動は、こうした国内の運動との人的な連続性を有していたとされている。従来の研究においては「開かれた活動」内のアクターの行動が注目されてきた。一方で、各地の活動に共通する考え方、活動の差異については充分に議論されてこなかった。そこで、本稿においては、東ドイツ各地の「開かれた活動」の展開過程の相違と、「開かれた活動」を特に出国運動との関係に注目し、東ドイツの体制批判運動の中で位置づけることを課題とする。各地の展開過程の差異を検討するにあたり、イェナ、ライプツィヒ、ベルリンにおける「開かれた活動」及び、「開かれた活動」と人的な連続性を持つとされるグループを対象とした。

第 1 章においては東ドイツの教会政策と青年政策についての検討を行った。ここでは政府によって社会主義の貫徹が目指され、異なる展望が許容されなかったことを確認した。第 2 章において「開かれた活動」の端緒と、ハイノ・ファルッケの「異なる人々のための教会」を検討した。この章では「開かれた活動」の発想を確認し、「開かれた活動」の東ドイツ政府にとっての位置づけを行った。

第 3 章においてはイェナの「開かれた活動」を主催したユンゲ・ゲマインデ・シュタットミッテから、「活動サークル連帯教会テューリンゲン地域グループ」への変遷を検討した。第 4 章では「開かれた活動」が重要な役割を果たしたとされるライプツィヒの「平和の祈り」の展開、第 5 章ではベルリンの「開かれた活動」が他の独立グループと協力して「下からの教会」として展開される過程を検討した。

最後に第 6 章において、「活動サークル連帯教会テューリンゲン地域グループ」、「平和の祈り」、「下からの教会」の 1989 年の転換期における展開を検討した。

以上の検討の結果、「開かれた活動」は、異なる考えを持つ人々との対話が社会の発展を促進するという発想を有していたことが理解された。この発想をもとに、政府が貫徹を目指す社会主義のイデオロギーとは異なる考えを持つ人々が集まることのできる空間が創出された。「開かれた活動」の展開は各都市で異なっている。組織は変更されたが、人員と発想が受け継がれたイェナのパターン、人員、組織、発想が継続されているライプツィヒのパターン、「開かれた活動」の発想が、体制批判的なグループの拠点としての役割を引き受ける形で発揮されたベルリンのパターンに分けられた。「開かれた活動」は 1968 年から 89 年に至るまで、東ドイツ社会において異なる考えを持つ人々を許容する空間を提供し続けた。こうした空間には国内の運動家のみならず、東ドイツからの出国申請者も参加可能であった。ここから、出国申請者との協調が成立し、特にライプツィヒにおいて 89 年の国内の運動の拡大につながった。以上の点で「開かれた活動」は東ドイツ国内の体制批判運動を支援するものであったと理解される。